

小林正人「サブプライム金融危機の機序と『サブプライム証券化機構』」2018 年

5 サブプライム証券化機構の内部構成と信用膨張

疑問点・論点

5 章では住宅ローン債権の証券化ビジネスは、モーゲージ・バンクから買い取った大量の SPL 債権を裏付けとする証券化商品を米国や欧州の金融機関に大量に売り込み、その販売代金がモーゲージ・バンクに還流して次の SPL の資金になるというグローバルな資金循環を実現し、格付け会社や金融保険会社などは、この資金循環を補助した。

とあるが、サブプライムローン問題は「証券化」そのものが悪手だったのか。また格付け会社はサブプライムローンの焦げ付きが増えると価格を大幅に下げるなどの無責任さなども問題視されたが、格付け会社の情報を受け取る側はどうすべきだったろうか。

A 証券化そのものは悪ではない。証券化することでグローバルな取引を行えるようになり、低所得者も参加できる {住宅が買える} ようになった。
ただし、品質の良い証券を買い取ってしまったので、何かも証券化するのはよくない。

B サブプライム問題では証券化はよくない。

C 新規ビジネスのうで儲けを得ようとした証券化自体に問題はなかったが、当時 shadow bunking のように証券化に対する 規制 がなかったために投資銀行に好き勝手させてしまったのが問題だった。

D 証券化自体は悪くはない。ただ、証券化をしすぎて リスクを拡散させすぎてしまったことが悪い。

(時間制約のため、格付け会社の問題は先生の説明だけがあった。)

以上